

* 歯科臨床40年を振り返って *

私は1970年7月(30歳)に診療所を開設してちょうど40年となる。これを機に院長を次世代に引き継ぎ、責任ある立場を退こうと考えている。しかし、診療行為そのものを止めようとは思わない。受診者に喜ばれスタッフにも喜ばれ、毎日が楽しくやりがいがある歯科臨床の仕事、これを手放すわけにはいかない。

先日84歳の受診者に、大きな感謝の言葉をいただいた。20年前に8歯欠損の口腔をブリッジで修復したが、それが現在も問題なく機能し、義歯を入れている友人に羨ましがられるとのこと。「先生には脚を向けて寝られません」という言葉をいただいた。毎月欠かさずにメンテナンスで来院するご本人の努力も大きいですが、機能維持の継続をサポートできる歯科医療は素晴らしいと考える。

このような長期に及ぶ多くの受診者とのかかわり合いから、“歯科医療とは受診者と生涯にわたりつながりを持ち続ける仕事であり、これが摂食嚥下を通じて受診者の健康を維持し、結果的に質の高い歯科医療は寝たきりや認知症の発病を抑えて医療費の節減に大きく貢献している”と身をもって感じている。

歯科の修復治療は質の問題が大きい。質の高い歯科治療は初期費用が大きかったとしても、長期にわたって維持されれば、時間的にも経済的にも無駄がなく、何よりも歯が失われない。低質医療の繰り返しで歯が失われていく現在の医療保険制度を変えていかなければならない理由がここにある。

それにつけても、このように歯科医療のやりがいを認識し、また、それを次世代に引き継ぎたいと考えるようになったのは多くの先輩諸氏のおかげである。なかでも接着臨床を始める基を作ってくださった増原英一先生には感謝すること大である。残念ながら、増原先生は2009年9月に88歳で逝去なされたが、先生が歯科医療界に残された功績は大きい。世界に先駆けて接着性レジンを開発したうえで日本接着歯学会を設立し、歯科臨床を大きく変えたが、それ以上に、良質で効率のよい歯科医療を国民に提供する責務を抱き、社会に多くの働きかけを行っておられた。1994年に発行した対話集『日本の歯科医療を考える』は、16年たった現在においても示唆に富む内容である。

私が4-META/MMA-TBB接着性(スーパーボンド)に関心をもつようになったのは1980年2月に、増原先生から臨床試験を依頼されたことにある。開業10年目、大学院のテーマが適合精度であったため、修復物には自信をもっていたはずであったが、10年に満たずして脱離してくる症例を経験するようになり、無機セメントに大きな疑問を持ち始めていた時期である。歯質と金属に接着し、唾液中に溶解しないこの接着性レジンに飛びついた理由がここにあった。

以来、30年が経過した。私の臨床は修復物の接着維持から始まり、破折歯の接着保存、歯髄の接着保存、接着性レジンによる根管充填、意図的再植時のMSBパック、i-TFC根築1回法など、この4-META/MMA-TBBレジンで大きく発展した。ことに、材料そのものはほとんど変わっていないのに、これだけ多くの治療分野に展開し、また他の接着性レ

ジンの追従を許さず、30年もの間変わらず使用されるこの接着性レジン素晴らしい。これは水の存在下においてもMMAレジンを硬化させ、そのうえ、接着界面から硬化を開始するTBBを重合開始剤として導入した増原英一先生の功績である。未重合モノマーを残さないために組織親和性が高く、そのうえ、再生上皮との間にラミニンやインテグリン等のタンパクを発現することで細胞を誘導することが明らかになり、新たに歯周パックやインプラントへの活用が期待されるようになったこの接着性レジン、これからまだまだ発展するであろう。

それにしても、日本の歯科医療界は元気がない。ことに次世代を担う若者に夢がないように見える。そのようにした我々は大きな責任を覚える。何をどうすれば輝ける歯科医療界に転換できるのか。それは歯科医療の質を上げ、それを維持することである。

歯科医療の大きな部分を占める歯内療法は、高度の技能を必要とし、そのうえに必要となる修復物は治癒作用のない製作物である。また、この製作物には審美性が要求される。長期の維持と審美性を満足させるためには、技術に裏付けされた治療と製作物の質が大きな要素となる。低く抑えられた日本の保険医療制度の中で、この歯科医療の質をどのように維持するか、その方法論が決め手であると私は考える。

まずは、質の高い歯科医療が日本の超高齢化社会を元気にし、医療費も節減することを実証することである。高質の歯科医療は結果的に費用が少なく、時間の無駄がなく、歯も失われないことを社会に知らしめることである。それが、質を確保できる保険制度に変えようとする社会の要求を高めることにつながる。そのためには何から始めるか。それは現在の医療制度の許された枠内で、目的とする歯科医療の質を確保する方法論を構築することであり、歯科医師一人ひとりがプロフェッショナルとして“歯科医療の質の保証”に取り組み、それができるマネジメントシステムを作り上げることである。

私は多くのことを先輩の先生たちに教わった。それを次世代に引き継ぐこと、これが歯科医療の価値を高めるために私たちがまずなさねばならぬ仕事であると、強く意識する今日である。

本書が亡き先輩諸先生への感謝の気持ちをお伝えするものとなり、また、次世代の先生たちに『歯科医療のやりがいと喜び』を継承する役目を担うものとなり得れば幸いである。

最後に、私が歯科臨床医として常に新しい発想を展開できたのは、岡田常司院長と中本弘子副院長、ならびにスタッフの存在がある。また、いつも陰から私を支えてくれた妻・牧子の存在も大きい。心から感謝の意を表す。

なお、本書は「臨床の達人」シリーズとして、飯島国好先生、村岡秀明先生、今井文彰先生の3名による企画のもとに、インタビューが収録された経緯があり、それが本書を執筆する契機となりましたことをお断りしておきます。本書上梓のきっかけを与えてくださった3名の先生方に深く感謝の意を表します。

2010年8月吉日

眞坂信夫